高木市之助全集

第二巻

講談社

高木市之助全集　第二巻

叙事詩の伝統・新羅へ

昭和五十一年七月二十五日　第一刷発行

著　者　高木市之助
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一・郵便番号一一二
電話・東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替・東京八―三九三〇
印刷所　株式会社精興社
製本所　牧製本印刷株式会社

©高木市之助　昭和五十一年
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan　0391-423223-2253(0)　（術A）

目次

I　叙事詩の伝統

叙事詩の伝統……3
神話時代から歴史時代へ……20
古事記文学における英雄への途——雄略天皇について——……29
英雄への途——雄略天皇の場合——……50
英雄の物語……66
古事記の世界……105
記紀の文藝性……116
英雄時代論議……125

記紀歌謡覚え書き……137
古代歌謡……179
四謡雑記帳――記紀歌謡論の前書き――……187

II　新羅へ

新羅へ……199
万葉集の歴史的地盤……212
万葉集における歴史の意味……233
志賀の白水郎の歌一首……245
万葉地理　筑前と筑後……252
万葉集の素樸美……261
東歌のある問題点について……280
二つの風土――万葉文学の風土文藝論的考察――……286
あゆちの水……305

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

万葉の発見……313
万葉とその伝統……321
万葉集を作り出す者……350
万葉と民衆……361
万葉の美しさ……374
万葉美の展開……388
万葉集の本質……398
万葉集の謎の謎……415
万葉集の文藝学的研究法……422
万葉研究覚え書き……439
万葉研究一千年……444
斎藤茂吉の人麿追究……452
折口博士の記紀万葉研究について……464

繁栄と落魄……476
解説……久米常民……485
解題……中西達治……498

I

叙事詩の伝統

叙事詩の伝統

叙事詩という用語はもちろん西欧の影響を受けてからの日本のことばであり、したがって叙事文とか叙事法とかいうふうに慣用されてきた漢文的用法へ溯って詮索すべきものではなく epic, Epos, épopée, などという欧語と同じ意味に考えるべきであろう。しかし叙事詩が西欧においてもこの二、三世紀の間に大幅にその意味を変改拡充していったというもう一つの事実も見逃してはならないであろう。実際アリストートゥルが紀元前四世紀にその詩学で悲劇と対立させて主張した叙事詩論の時代と十八世紀の後半におけるヘルダーのもろもろの民族詩論の時代とでは相当のひらきがあり、さらに故W・C・ケア氏が十九世紀の末葉に『エピックとローマンス』を著した時代とではもっと大きなひらきがあるべきである。これはアリストートゥルの場合、叙事詩といえばただホーマーがあるばかりで、両者はまったく同義語であったが、ヘルデルになればゲルマン文化の生みだした諸民族詩が新たに叙事詩の範疇に入ってき、さらにケア氏において視野は拡大されて、ビオウルフ、ニーベルンゲンリード、シャンソン・ドゥ・ローラン、アイスランドのサガにまで及んだからで、このことは結局単に視野が拡大されたというだけのことではなくて、そのような拡大によってアリストートゥルによる叙事詩の理念が漸次是正されていったことを意味すると見てまちがいはない。もしそうならば日本

文学史における叙事詩または叙事詩的な文学の動向を考えるためにわれわれは欧における叙事詩論の推移をあやまりなく把握しなくてはならない反面において欧の叙事詩論もまた、それがグリークエピックからチュウトニックエピックへ、さらにイゴル軍譚のようなスラヴ的エピックやマハバーラタ、ラマヤナのようなインド詩を取り入れた場合のように極東の日本詩を受けいれることによって多かれ少なかれその見解を改めつつ、いっそう普遍妥当な叙事詩論を展開していくべきであって、その意味において叙事詩とは必ずしも欧に専属する固定不変の釘付けされた概念やジャンルであってはならないであろう。

ところで以下は、日本文学における叙事詩の伝統についてというよりもむしろ伝統に関係する一つの問題について、右のような日本文学の一般叙事詩論への関連を考えてみたいのだが、卑見にしたがえば叙事詩の伝統という問題は日本文学において個々の作品の不成熟にもかかわらず結構採りあげられるあるいは採りあげられなくてはならない重要な課題なのであり、同時にそれは西欧における叙事詩論がまだ考える機会を持たなかった新しい問題を蔵しているようにも思われる。

諸文化民族の場合にそうであったように、日本においても叙事詩的文学が民族ないし階層の勃興時代に求められるとすれば、われわれはそのような二つの時代を予想することができよう。その一つは日本文学の創世紀であるいわゆる記紀歌謡の時代であり、もう一つは武家勃興の鎌倉時代である。

前者を具体的に文学そのものについて考えるとすれば、神武東征の伝説にからまってのこされている一群の歌謡と顕宗記武烈紀の両天皇に付属して伝えられている一群の歌垣歌謡とが辛うじて役だつ。それぞれのやや詳しい解説は旧著『吉野の鮎』(本全集第一巻)所収の拙稿「日本文学における叙事詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時代」とちかく出版されるはずの『古文藝の論』（本全集第六巻）に収められる「歌垣―闘―」に譲るとして、両者を一括して言いうることは、記紀歌謡がおそらく記紀の編著者の構想に指導されて、国家の平和順調な成立過程を裏付けるのに都合のいい歌謡の中から主として採択されたと想像されるにもかかわらず、この両類の歌謡が辛うじてそうでない別の歌謡として記紀の中に生きながらえているということである。この事実はもちろん、両者をそのまま叙事詩ないし叙事詩的文学として認めようとすることではない。われわれが両者に認めようとするのはそのようなものではないが、そのようなもののいわば一つの投影であり可能性なのである。

いったい日本文学における詩の歴史において近世まで和歌が圧倒的であった事実を疑うことはできないが、そのような和歌の系譜を溯っていった場合、われわれは最後まで異質的な存在を持っていないかどうかという点になると問題は別である。ここでわれわれは一応和歌的なものとは何かという問題につきあたるのだが、それはこの稿の前提として扱うにはあまりにも大きな課題であると同時に、じつは日本文学の研究者たちにとっては、理論的にはとにかく、経験的には、自然になにかしら通念のようなものができていて、それにしたがってもたいしたくいちがいや誤解を生じない問題でもある。要するに（とは、そうした意味で安易簡単にまた常識的便宜的に言ってということでしかないが）和歌とは（少なくとも近世まで脈々と続いてきたところの古典和歌とは）抒情詩（Lyrik）ではなくとも抒情詩的な（lyrischen）或る文学（第一藝術か第二藝術かは別として）であると言えはしないか、もしそうなら、和歌は王朝物語の本質と言われるあのあえかな〝もののあはれ〟の母胎としては、まことにふさわしい様式であるが、それだけにまた、このような和歌的なものが日本の文学をどこまで溯

っても支配的であるとすれば、それはそのまま、日本の文学が本来抒情詩的であって叙事詩的ではありえないことになり、換言すればわれわれは日本民族の文学に叙事詩あるいは叙事詩的文学を一応あきらめなくてはならないことになり、逆に言ってよかれあしかれわれわれは和歌的な文学の伝統に満足しなくてはならないことになるであろう。（誤解を避けるために一言するが、私は和歌的な日本文学を否定しようとしてものを言っているのではない。それどころか日本にこのように純粋に抒情詩的な文学が護られてきたことはたしかに一つの特異な歴史的事実であるには相違ない。）私は今どこまで溯ってもと漠然とした言いまわしをしたが、それは具体的に言えば、われわれが記紀歌謡以前に溯って日本文学の実在を実証することが許されない以上、それはもし記紀歌謡の世界まで溯ってもなお和歌的なものが支配的ならばということでしかない。つまり問題は記紀歌謡は和歌的抒情詩的な一色に塗りつぶされているかどうかということなのである。そして答えは前記、神武東征歌謡と歌垣歌謡に関する限り否である。つまりわれわれは記紀の歌謡まで溯りつくせば和歌の伝統へ連なり得ない異質的な別の系譜が求められなくはないのであって、もしわれわれの文学に叙事詩ないし叙事詩的文学の投影や可能性を予想しようとならば、われわれはそれをこの異質的な存在に求めるほかはないのである。

前にも言及したように記紀歌謡がそのまま叙事詩でないことは何よりもそれらが記紀歌謡であること自身これを語っていると言える。なぜなら記紀歌謡は文字どおり記紀の説話の中に採択された、主として説話中の人物がその発想を託する小型歌謡であって説話それ自体をうたう文学ではありえないからである。もっとも説話中の人物が説話を語るということもけっして不可能なことではなく、現に

記紀の中でも八千矛神と沼河比売、須勢理毘売との贈答歌などは十分説話的であると言えるが、今問題にしている神武東征歌謡と歌垣の歌謡とはいずれも説話の主人公がとっさにうたう断片的な歌謡であって、もし叙事詩の通念にしたがって、なんらかのストーリを持つことが要請されるとすればこれらの歌謡はそれだけですでに叙事詩から失格する。しかしながらこれも一般に信ぜられているように、いわゆる the authentic epic の生まれる時代や社会が或る英雄時代を負うものとすれば、これらの歌謡にストーリがあるかないかということとは別に、そこにそのような時代を負うだけの英雄的な詩的形成があるかどうかという別の標準によって叙事詩または叙事詩的文学との関連を考えてみることもできるはずである。もっともそれはこの二類の歌謡を説話の中の歌謡として考えることではない。なぜならば、そのようにしてたとえば神武東征の諸歌謡を東征中の「神武天皇の御製」にかかるものとし、歌垣歌謡を同様武烈天皇や顕宗天皇の時代の天皇対鮪対影姫や大魚の三角関係からうたい出されたものとして考えることは、それはこれらの歌謡をすでに英雄時代を終結した他の段階や社会を反映する次代の文学として考えることでしかないからである。そこで両類の歌謡を英雄時代（そのような時代が仮りにあったと仮定して）の歌謡にまで復原するためには両類の歌謡を記紀から切り離して、まっぱだかにしてかからなくてはならないのだが、そのようなはだかの両類歌謡にまず考えられることは、神武東征歌謡がそうした伝説的関係から解放してもやっぱりある戦争の歌謡であり、同様に歌垣歌謡が影姫や大魚の伝説からばらばらにしても、なおそこには幾対かの歌垣的な歌の対決（贈答というよりもその反対の関係である）のようなものが残るということである。しかしながら英雄時代とは何かがあった時代の謂ではなくて、何かであった時代のことだといわれる。民族相互の間にどのよ

うな戦争がくりかえされたかとか愛人争奪のためにどのような歌垣が流行したかということよりもむしろそのような戦争や歌垣を越えて時代はどのように英雄的であったかということを直接歌謡のうえに予想することが当面の問題であろう。具体的に言って、詩の英雄時代とはつぎの浪漫時代が文字どおり現実を遊離して夢幻理想の花美しく匂うのに対して、あくまでも生活に即し足を地上につけて一歩、また一歩と現実を追究する行動の時代であった。情緒によって久遠調和の世界にあこがれるかわりに意欲によって名誉や勝利を奪い取ろうとする社会であり、要するに粗野ではあってもはつらつとして揺れ動いている勃興の時代であったのである。ところで当面両類の歌謡に反映しているものはまさに日本古代におけるそのような時代社会である。たとえば「宇陀の高城に鳴わな張る」に始まる神武東征歌謡の中の一首は東征の説話から解放しても歌自体が或る戦勝を背景とする酒宴歌謡を予想せしめるのであるが、問題はこの歌謡に戦争がくりかえされている時代があるということではなくてそこにリアリスティックな（必ずしもリアリズムとは言いきれないが）また勃興的な英雄時代があるということである。鳴を捕るためにわなを張ったら、目的の鳴がかからないで鯨がかかったという比喩は記紀の説話から切り離しても、戦争におけるある意外の大勝利を意味していることに疑いはないが、（くじらが鯨でなくて鷹であろうという説を私は採らない。理由についてはここで冗説するひまがないので割愛する。）問題はこの比喩の背後に戦争があることではなくて、この比喩それ自身のリアリティがその背後にリアリスティックな英雄時代のあることを感ぜしめているということである。狩猟は彼らの生活であり、しかもそこには、宇陀の高城という彼らの現実の環境がある。彼らの大勝は空想の世界へ誇張されるかわりに日常現実の生活へしっかりと結びつけられているのだ。もっともその

ような比喩の世界へ突如として鯨があらわれることは一見現実ばなれのした空想のように聞こえるが、よく考えてみるとこのできごとはそんなにとっぴに考えなくてもよさそうである。それはつまり、この戦勝の祝宴に彼らが現実に鯨肉を飽食していた事実を語っていることでしかないのであって、たとえば、彼らが今食膳に供されている鯨肉の一片を高く差し上げつつ「オイ、みんな、鴟わなに鴟がかからないで、鯨がかかったぞ」と豪言する姿はけっしてとっぴでないばかりか、それは後代の諸歌がかれこれと空想の世界に比喩を求めるよりもはるかに現実的であると言えないであろうか。もっともこのような古代に大和の山奥に鯨肉を予想することは不自然だという観方もありうるけれども、私見にしたがえばそれこそ、彼らの生活が鯨肉を食膳に上せうる程度に海岸地帯と交渉を持っていた事実やあるいはこの歌の形成がそのような交渉を可能にするほどに文化の進んだ時代においてなされた事実やを語るなによりの証左でなくてはならぬのではないか。またこの歌の後半で「旧妻が肴乞はさば、たちそばの、実の無けくを、扱きしひゑね。後妻が肴乞はさば、いちさかき、実の多けくを、扱きだひゑね。」とうたうあたりはいかにもいい気なそして豪放快適な戦勝宴の雰囲気を象徴してあまりがないが、それにしてもわれわれは比喩がけっして天馬に空を走らせるのではなくて、どこまでも彼らの現実日常に即せしめていることを見のがすことはできない。前妻の冷遇と後妻への愛情の対照がほほえましいまでに彼らの現実を直写しているばかりでなく、たちそばやいちさかきの実にしても、いささかの空想や抽象を含まない彼らにとっての日常触目の自然であり生活なのである。要するにそこに題材としてあるものはややもすれば空疎な誇張や観念的な形容の世界へ誘惑されそうな戦勝の歓楽であるにもかかわらず、歌謡として実際に形成されているものは意外にも（というのは古典和歌の風

流みやびな発想に慣れているわれわれにとって）しっかりと生活を踏みしめた手堅い現実性なのである。右は、ただ一首について多少こまかに例示したのであるが両類の歌謡にはほとんど例外なしにこのような現実性がゆきわたっていて、背後にある英雄時代を示唆していると言える。また二群の歌垣歌謡は記紀の説明によれば、天皇と平群の鮪とが歌垣において抗争しあった歌ということになっているが今こうした説明から解放してみても、これら相互に対称的に書かれている各対の歌の間には、後のいわゆる相聞や贈答に見られるような同調協力的な関係とは質を異にした別の、もっと闘争的な関係が相摩擦（さつ）していることを見落とすことはできない。たとえば、

大宮のをとつはたて隅かたぶけり
おほたくみをぢなみこそ隅かたぶけれ

この両歌は記紀の伝説から解放しても、ある二人の作者による問答歌であることは疑い得ないが、しかも両者の関係は、

にひばり筑波をすぎていく夜かねつる
かゞなべて夜には九夜日には十日を　（記紀）

から、

みなとの葦の末葉を誰かた折りし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com